Mt. IBUKI
ふもと

スキー客を迎えた上野の民宿

滋賀県が誇る名峰の伊吹山。その南西麓の扇状地には、上野という集落がある。この集落は、伊吹山の登山口に位置しているので、登山者の多くは同地を訪れることになる。そのため、上野は古くから登山者を様々な形で受け入れてきた歴史を持つ。例えば、江戸時代には上野の人々が登山者の案内人を務めているし、大正時代には同地で登山者専用の旅館が営業されていたという。

▲民宿経営者と登山客（昭和30年代）
（『写真でふりかえる伊吹山物語』より転載）

昭和の中頃に入ると、上野に転機が訪れる。それは、伊吹山スキー場の開設に伴って、多くのスキー客が上野を訪れるようになったことだ。その影響を受けて、上野ではスキー客を受け入れるための民宿が営まれるようになる。

しかし、スキー場開設当初から上野の家々が民宿を営んでいた訳ではない。最初は、朝にスキー場のリフト営業が始まるまでの休憩場所として、スキー客を受け入れていたようである。しかし、スキー客増加に伴って民宿へと変化していったという。最盛期の昭和35年（1960）～昭和40年（1965）頃には、180世帯の上野に、少なくとも80軒ほどの民宿があったそうだ。

ちなみに、上野の民宿の一般的な営業スタイルは一泊二食付き。食事の際に出される漬物が好評だったようで、その味を味わいたいというリピーターもいたそうだ。昼間はスキー場で颯爽と滑り、夜は民宿で絶品の漬物を食して舌鼓を打つ。なんと贅沢な話だろうか…。

もちろん、上野の人々にとって、多くのスキー客を受け入れることは大変な話だ。ある民宿では、沢山のスキー客を受け入れてしまったので、家の人の寝る場所がなくなってしまい、蔵の中で寝ることになったというエピソードがある。

しかし、多くのスキー客の来訪が、登山口としての上野の賑わいに貢献したことは言うまでもない。

高速道路の整備による日帰りのスキー客の増加は、民宿利用者の減少に繋がった。また、伊吹山スキー場の休業は、民宿に大きな打撃を与えた。上野会館の高橋兵助さんによると、現在営業を続けている民宿は、山中と麓を含めて5軒程しかないという。

多くのスキー客を受け入れて、上野の賑わいを支えた民宿。その多くは消えてしまったが、スキー客の記憶の中で、旅の思い出として残り続けて欲しい。（紘）

■参考文献

伊吹町史編さん委員会編『伊吹町史　通史編　下』（伊吹町、1995年）
みんなが楽しい伊吹山プロジェクト編『写真でふりかえる伊吹山物語―神の山と歩む上野人』（米原市上野区、2015年）
高橋順之『伊吹山風土記』（サンライズ出版、2022年）

Mt. IBUKI
2合目

伊吹山と山岳信仰

自然とともに暮らしていた古代の人々は自然を崇拝し、畏れていた。特に、四方からその姿をはっきりと見ることができ、大きくそびえ立つ伊吹山は、近くに住む人々や修行者たちから篤い信仰の対象となったはずである。

▲伊吹山頂　ヤマトタケル像

「ヤマトタケル」と荒ぶる神

少し前のことになるが、長浜城歴史博物館（以下「歴博」）が平成16年度に「近江湖北の山岳信仰」と題して特別展を開催した。湖北の自然と、そこに根付く信仰の関係について、様々な遺物を絡めて多角的にまとめたものだった。舞台は己高山をはじめ、大箕山、天吉寺山、そして伊吹山で、山岳信仰はいわば「メインテーマ」であった。

当時の企画の主担当であった長浜市歴史遺産課の秀平文忠さんに聞いた。そもそも、なぜ長浜市の歴博で伊吹山を?という素朴な質問だ。

▲長浜市歴史遺産課の秀平文忠さん

「当時は市町の合併前なので、己高山をはじめ、どこも長浜市ではないのです。そのいくつかの山の中でも、湖北エリアにおいて伊吹山はシンボルです。米原市も合併前でしたので、伊吹町教育委員会などの協力を得てこの企画展を行うことが出来ました」

「伊吹山が山岳信仰の舞台となった理由は、なによりその存在感。四方から見分けられる独峰です。そして、豊富な積雪が示すように厳しく、時に急変する天候は、そこに『荒ぶる神』の存在を感じさせるものでした」

そして、『古事記』である。伊吹の荒ぶる神がヤマトタケルを倒したというエピソードだ。

「神話のやや創作的な部分はさておき、真実ゼロでもないわけで、荒ぶる神の『強さ』には、中央政権をしのぐ古代豪族の存在をうかがわせます」

うむうむ。「山岳信仰」という言葉がす